

AMDA・岡山老健協共同 新潟県中越沖地震緊急支援活動報告

AMDA職員 佐伯美苗

【支援活動の経緯】

7月16日午前10時過ぎ、中越地方沖で強い地震が発生したとのニュース速報に、まさか、またなのかと、とっさに思ったのは、私どもAMDA職員だけではなかったはずである。

2004年10月に起きた中越地震に際し、AMDAは岡山県老人保健施設協会との共同事業として、小千谷市にある介護老人保健施設春風堂様に介護福祉士など専門職を派遣する人的協力を実施した。止まぬ余震、インフラ復旧の停滞、岡山からの補給線の長さ…。派遣された専門職も1週間で交替するとはいえ、疲労こんぱいの態であった。地元の方々のご苦勞はいかばかりであろうか。それがたった3年足らずで繰り返されることになるとは。

派遣決定前後に、介護老人保健施設すこやか苑理事長でもある、菅波茂AMDA代表が春風堂様と協議し、現地に馴染みのないAMDAの受け入れ先となって下さることとなった。慌しく発災当夜のうちに岡山を出発し、翌朝北陸の海岸線を伝って柏崎入りし、まだ混乱している市街から、小千谷市に入った。北村雄哉春風堂理事長のご尽力により、柏崎市の介護老人保健施設米山爽風苑様との協議を重ね、まず3人の介護専門職を岡山から派遣することとなった。

地震直後の混乱した中、普段なら利用者の皆さんで体操などされるのであろうホールに、ポータブルトイレが引き出され、丈の高い観葉植物は床に寝かされている。空調が使えないために尿臭や体臭が建物にこもるといふ状態を目の当たりにし、ご自宅も被災されて休まる暇のない職員さんたちのお手伝いになれるなら、と真実思った。爽風苑様への人的支援は、18日夕刻より1週間継続された。

一方、病院併設型でない独立した介護施設への応援は必要との、高桑正道柏崎市刈羽郡医師会長からの要請を受けて、高橋正樹柏崎市役所介護高齢課長と調整の結果、特別養護老人ホームくじらなみ様、同じくしおかぜ荘様に、専門職を派遣することになった。

くじらなみ様は、7月1日の開所から2週間、まだシステムが出来上がっていないうちに被災され、困惑は大きいように見受けられた。しおかぜ荘様は、海岸に近い旧市街に位置し、被災程度も他の施設に比べて深刻、緊急入所されるご利用者様も特に多かった。状況は異なるが、やはり人手はいくらあっても足りない、という点で一致していた。そこで各施設に専門職を2人づつ派遣し、人的支援を同じく1週間継続した。

【支援活動に際して気づいた点】

発災直後に高桑先生の危惧しておられたこととして、介護施設でケアするべき被災者が、医療機関にかつぎこまれるなど、治療の必要な「重傷者」である高齢者と、介護の必要な「重

症者」である高齢者との区別をつけられず、医療機関の混乱をまねいたことが挙げられる。

AMDA・岡山老健協のチームは、こうした、いわば「介護面でのトリアージ」には間に合わなかったが、いち早く介護施設への応援に積極的に入ることで、結果として、間接的に地元医療機関を支援したこととなった。

今回の地震では水、ガスはほぼ被災地域全域で停止されていたが、これらの施設のある地域では、月末までにはほぼ供給が再開された。この点は、各施設職員の負担を大幅に軽減したといえる。水とガスが使えないために、入浴、洗濯、用便などに用いられる生活用水が使えない、また空調が使えないために、清潔維持がたいへん困難になることが、ご利用者様だけではなく、各施設で働く職員さんにかに負担になったかを考えると、水とガスがひとまず使えるようになったことだけでも、ストレスが軽減されたと感じられた。

とはいえ、入浴できなかったことによる皮膚状態の悪化、空調停止による体調不良、脱水といった事態も起こっていたため、インフラが復旧したと言っても、体調管理のシステムが元に復するにはさらに時間を要することと思われる。

また、3年前と同じく今回も、被災したにも関わらず、いずれの施設の職員さんも献身的に業務に励んでおられ、そのプロフェッショナルとしての倫理の高さに、頭の下がる思いがした。

【将来への学び】

また、派遣した介護専門職から聞かれた声として、ご利用者様個人とさらに深いコミュニケーションをとることにより、不安定な精神状態を示していた方々に対する心のケアまでおこなえればよかった、というものがあつた。

派遣元である岡山県内の各施設の業務状況、受入れ先施設の事情など、懸案事項は多々あるが、今後専門職を交えて検討してゆくべき課題と思われる。食事介助やオムツ交換など、専門職であれば技術的にクリアできる業務に対し、緊急支援の枠内でご利用者様の人生にまで踏み込むことは可能であるかどうか。

さらに、やや語弊のあるいい方になるが、中越地震では、柏崎は概ね小千谷や山古志に対して支援者であったが、今回の中越沖地震では被支援者となった。小千谷は当然逆の立場である。地震大国日本にあって、このまれな経験を全国の介護施設に働く方々に、また両地域に住む方々に、ぜひ他の地域に広めて活かしていただきたいと、切に願う。

わが瀬戸内地域は、災害に見舞われることの少ない地域であり、危機意識も、備えも十分でないといわれている。それでも、中越地震、そして中越沖地震の支援活動に参加した介護専門職は、支援の経験を、それぞれの職場で活かそうとしている。将来は、中越地方の皆さんと、「災害介護学」のような、経験に即した学びの場を提供できればと考える次第である。

最後になりましたが、日本医師会には新潟県医師会や柏崎市刈羽郡医師会に連絡の労をとっていただきました。高桑会長はじめ、阿部常一事務長、事務局の皆様にあたたかく受け入れていただき、また有用なご助言を数々承りましたこととともに厚く御礼申し上げます。

炎暑のみぎり、復興に向けてたいへんな道のりと思われませんが、皆様のご健康を岡山の地より心からお祈り申し上げます。



血圧を測定する、稲葉真由美看護師



食事介助中の笹邊泰介介護士

